

北の国の人々の夏祭りは、お盆に帰って来られる神になった先祖の方達が迷わない様に村々や家に分かり易い様、高めに目立つ印をつけて鐘や太鼓を叩き、笛を吹き、灯りを灯し待った事がねぶたや竿燈の始まりと言う(観光案内に)一説もありました。

私達一行8名は朝4時に出発し、午後1時に予定通り八戸に入り、八食センター内で遅い昼食をとり、その夜は三沢へ泊り、翌朝アメリカから昭和の初め無着陸で飛来した記念海岸に案内されましたが、津波で模型飛行機も砂の中に残骸を覗かせているだけでした。

目指した恐山はかつて20年前に訪れた時にはまさに幽明界を異にする凄絶な死者の聖地でありましたが、今は観光整備によってかつての畏怖感はありませんでした。大自然の景観を人工整備する難しさであります。

睦奥湾を南下してねぶた会場へ入り、夕食の店の配慮でメイン会場へ席を用意して下さいる好運に恵まれました。照明を落とした6車線のビル街の大通りを、薄明るい提灯に先導されて、はるか彼方はずれに姿を見せた「ねぶた」は黄金色の光となって広い道路いっぱいとなって近づいて来ました。

後から後から現れる黄金の光を放つねぶたの像はテレビで見るスケール、存在感とは全く異形のものであります。私達も思わず「ウァー!! ギャー!!」と奇声を発しておりました。

ねぶたを囲む7連の大太鼓、笛、鐘、老若男女の群衆、親子三代の大群衆の絆がありました。

この三大祭りは連続5日間踊り続けるのですから、北国の人々の逞しさ、辛抱強さ、元気さは私達の比ではありません。来年は君津へ連れて皆に見せたいとの願望にかられました。

次の日の秋田竿燈祭りは、高さ12メートル、提灯46灯点けた竿燈が250本、秋田の夜空に黄金色の大きな稲穂となって揺れ動く様に、ドッコイショ! オエタサー! 根ッコイター! 私達も興奮して大合唱しておりました。この大竿燈の隙間を縫って、小さな子供達の竿燈が揺れており、沿道からも声援、大拍手が何度も湧いておりました。

祭りとはその村の伝統であり、人々の心の支え、絆ですから、それぞれの時代を懸命に生きて来た証拠として、どんな時代であろうと引継ぎ伝承して行く役目を忘れてはならないと思いました。

いよいよ最後の夜は山形花笠踊りへと参加しました。ねぶた、竿燈は見る祭りなら、花笠は踊の輪へ入る祭りかもしれません。12,000人の踊り子が街を踊り抜けて行く、それを見守り声援する人々、祭りは地域の最大コミュニケーションの場であります。ここで驚いた事は踊りのトップ集団は山形県人会千葉支部のプラカードであり、成田、千葉、八千代、習志野、佐倉と千葉県勢凡そ1,000名の参加がありました。

またこの会場でも見られた事は被災者の招待席が設けられ、明るい笑顔が見られた事でした。

ねぶた集団の中には、手押し車30台位のグループの参加もありました。

来年の君津市民ふれあい祭りに是非共活かしたいものです。